

(議事録)

## 都市想像会議

### 第9回：子どもの遊び×都市

#### 都市の子どもたちの遊び場づくりとは？

2017年7月10日（月）19時～21時

ヒカリエ8F/COURT

登壇者：



渋谷の遊び場を考える会

左から、入江洋子（代表）、小水知映子、山田実紀、森由美、高橋美穂子

渋谷はるのおがわプレーパーク <http://harupure.net>



一般社団法人TOKYO PLAY

左から、嶋村仁志（代表理事）、関戸博樹（プロジェクト担当）、高橋利道（事務局）、林希栄子（事務局）

TOKYO PLAY <http://www.tokyoplay.jp>

ファシリテーター：



左京泰明（シブヤ大学学長）、紫牟田伸子（編集家／プロジェクトエディター／デザインプロデューサー）

**紫牟田**：今日のテーマは「子どもの遊びと都市を考える」です。都市想像会議は、未来の都市を考えていくうえで、横軸をさしながら考えていくスタイルで行っています。今回、告知に「都市の子どもの遊び場とは？」と書きました。子どもは遊ぶことで成長していきますから、かつての子どもたちにとっては路地や空き地場も遊び場でした。しかしだんだんそうした遊び場というものは少なくなってきました。少なくなってきたことを嘆くのではなく、いま都市で「遊ぶ」ということを新たに切り口でつくることのできるのではないだろうか、ということ今日は考えていきたいと思えます。ゲストに「渋谷の遊び場を考える会」のみなさんと一般社団法人TOKYO PLAYのみなさんに来ていただきました。お一人ずつ自己紹介をお願いしますでしょうか。

**入江（渋谷の遊び場を考える会＝以下、S）**：みなさま、こんばんは。「渋谷の遊び場を考える会」の代表をしております入江洋子と申します。

**小水（S）**：こんばんは、小水です。2000年より子どもの居場所づくりを始め、「冒険遊び場」に行き着くことになりました。よろしくお願ひ致します。

**高橋（S）**：渋谷の遊び場を考える会の高橋と申します。よろしくお願ひ致します。

**森（S）**：渋谷の遊び場を考える会の森と申します。今日は私口下手なのでみなさま側に座ろうと思っていたら、席が用意されていたので驚いています。今日はよろしくお願ひ致します。

**山田（S）**：渋谷の遊び場を考える会の山田実紀と申します。渋谷で子育てしておりますので、現場の声をお届けできたらと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

**嶋村（TOKYO PLAY＝以下、T）**：みなさん、こんばんは。一般社団法人TOKYO PLAYの代表理事をしています嶋村と言います。よろしくお願ひ致します。

**関戸（T）**：同じくTOKYO PLAYの関戸と申します。主に研修を担当しています。実は古巣が「渋谷の遊び場を考える会」なんです。よろしくお願ひ致します。

**高橋（T）**：TOKYO PLAYの高橋と申します。事務局を担当しております。よろしくお願ひ致します。

**林（T）**：TOKYO PLAYの林と申します。事務局を担当しております。よろしくお願ひいたします。

**紫牟田**：進行は、私、紫牟田とシブヤ大学学長の左京さんで行っていかうと思えます。

**左京**：「子どもの遊び場」自体を考えることと、「子どもの遊び場」を通して展開していくことは大人や地域そのもの考えることに繋がることだと僕自身は思っています。よろしくお願ひ致します。

## 子どもが遊び育つ場所

**紫牟田**：それではまず、それぞれの活動をご紹介しますか。

**入江（S）**：「渋谷の遊び場を考える会」発足の理由をお話します。私自身は長野出身ですが、まちなかで育ちました。縁あって渋谷で子育てをしなければならなくなり、本当に悩みました。一時はわざわざ長野の山の中の幼稚園に入れたりもしましたが続けることはできず、東京に帰ってきました。そのとき、代々木公園で親たちが互いに育て合う自主保育をしているグループと出会い、渋谷の中では自然豊かな代々木公園で3年間子育てができました。けれども、小学校へ行ったらそんな環境がないことに落胆したんです。ですから、自主保育の頃に出会った世田谷区の「プレーパーク」のようなところが欲しい、子どもが自分の足で行けるところにそのような環境が欲しいと思って活動を始めたのが1998年のことです。その頃からゆるゆると活動してきた結果、2004年に渋谷区で唯一の常設のプレーパーク「渋谷はるのおがわプレーパーク（以下、はるプレ）」ができました。発端となったのは、その2年前に始まった「せせらぎ冒険遊び場」です。また2005年には、恵



比寿に期間限定のプレーパーク「アメリカ橋プレーパーク」をつくり、現在に至っています。私たちは、子どもには自然の中での外遊びがとても大事だと思っています。いろいろな素材や答えがすべて自然の中にはあり、発見も想像力も育つと思うんです。



はるのおがわプレーパーク（上）、せせらぎ冒険遊び場（下左）、アメリカ橋プレーパーク（下右） 資料提供：渋谷の遊び場を考える会

**左京：** 自主保育のときはのびのびと子育てができていたのに、渋谷の学校に行くことに落胆されたとおっしゃりましたが、具体的にどのような問題意識があったのでしょうか。

**入江 (S)** : まずは環境ですよ。代々木公園で育ち、山登りなどもしていて、そのときに何気なく撮った写真はすごくいいんです。学校で先生たちが撮ってくださったものと比べると豊かさが全然違いました。学校は大事なことなので必要ですが、同時に子どもたちが自ら育つ場所という、子どもたちに必要な環境をつくらなければならないということに直面したことを実感しました。

## 子どもの遊び場とみちあそび

**嶋村 (T)** : TOKYO PLAYの活動を簡単に紹介します。僕自身、入江さんがやっているような外遊びのプレーパークや冒険遊び場と呼ばれる場所で、20年位前に働き始め、長くやっていたんですが、あるとき気づいたんです。ここに来る人たちはここが好きでやってくるんですが、そうではない人たちにとってまちの中は遊び場ではないから「冒険遊び場で遊びなさい」と言われてしまう。実は、解決しなければならないのは、こういう遊び場の外にあるのではないかと思い始めて、「子どもの遊びと大人の役割研究会」を立ち上げ、2010年にTOKYO PLAYをつくりました。

イギリスには「London Play」という団体があります (<https://www.londonplay.org.uk>)。ロンドンという大都市の中で子どもたちが思いきり遊べるようにするための、いわばガスや電気のようなインフラみたいなもので、行政も企業も市民も研究者も実践者も、大人が何かしら子どもに関わって子どもが遊べる環境のためにアクションを起こせるような仕掛けをいろいろしているんです。London Playの事務局長さんに「東京でも必要だと思います？」と聞いたら、「決まってるじゃん！あなたはTOKYO PLAYをつくりなさい」って言われたのがきっかけでした。

その後、さまざまなことをしてきました。「次世代育成支援行動計画」という2010年から10年間の東京都の行動計画を検討する事業では、300人くらいの子どもたちにヒアリングをしました。この報告書は、TOKYO PLAYのホームページから見られるので、ぜひ見てください（次世代育成支援東京都行動計画（後期）の評価に係る事業 [http://www.tokyoplay.jp/\\_src/120/jisedai\\_report.pdf](http://www.tokyoplay.jp/_src/120/jisedai_report.pdf)）。子どもが自分たちの生活や住んでいるまちについて話すというのは意外とない機会だと思います。「東京って好き？」と聞くと、嫌いの理由ところに「どうせ発言しても意味がない」「女子高生というだけで舐められる」「大人が自分の意見を押し付ける」「小さい子が優先なのはわかるがボール遊びができる公園がない」「中高生が居場所にできる場はお金がかかる場所しかない」などという意見が見られます。「どんな大人になりたい、なりたくない」という項目には、なりたくない大人は「うるさい」「すぐ怒る」「人の話を聞かない」「すべてお金で解決しようとする」「子どもに冷たい大人にはなりたくない」……そんな話がいっぱい出てきた。こういうことから、「子どもが声を出せる」ということと「遊ぶ」ということは繋がっているということを発見しました。

去年、ロンドンと東京で「遊びの姉妹都市」提携をしました。僕らが勝手に提携しただけなんですけど、ハリー・ポッターの物語に出てくるキングスクロス駅9と3/4番線のホームから徒歩1分ぐらいの広場でセレモニーをしました。JALのロンドン支社がお金を出してくれて冊子をつくりまして、日本大使館の方もいらして、ロンドンと東京で遊びについての情報と人の交流を深めることを目的として発足しました。

その他、「やめましようをやめましようプロジェクト」と言っ、公園の禁止看板の写真をコレクションしていたこともあります（笑）。神社の4つしかないルールの一つに「遊ばないこと」が入っていたりしますね。プレイワークの専門研修もしています。10月1日都民の日には、東京中でのいろんな場所で遊ぶことは大切だからアクションしよう、という「とうきょうプレイヤー」というキャンペーンをやっていたりします。



いま一番動いているのは、「とうきょうご近所みちあそびプロジェクト」です。英語名で言うと「playborhood street TOKYO project」。「playborhood」というのは、play (プレイ) と neighborhood (ネイバーフッド) という意味を掛け合わせた造語です。外資系のHSBCグループからお金をいただいて、東京中の道を歩行者天国にして、遊びの場・子育ての場・世代交流の場というんなかたちにしてしまおうという活動です。



資料提供：TOKYO PLAY

この写真は、三鷹の駅前通商店街です。三鷹駅前から南側に1kmほど伸びている商店街があって、月に1回マルシェが行われて歩行者天国になるんです。その長い通りの交差点1ヶ所を止めて、遊び場になっています。

## プレーパーク＝冒険遊び場はなぜ必要か

**紫牟田：**写真家土門拳さんの写真集『昭和の子どもたち』では、路地で遊ぶ子どもたちの姿がとらえられています。子どもたちはどんな環境でも自分たちで遊び方を発明できる力を持っているのですが、現代の都市ではなかなか発揮できる場所がない。公園はだいたい整備された芝生のある場所かすべり台などの遊具のある場所、なんとなくこの2つです。しかし、「遊び場」と考えると、この2つのタイプの公園では全然足りないのではないのでしょうか。プレーパークは子どもたちに足り

ないものを補完する機能を持つ遊び場だと思うのですが、そもそもプレーパークとはどういう経緯でできたものなのでしょうか。プレーパークと冒険遊び場は同じものでしょうか。

**小水 (S) :** 「プレーパーク」をわかりやすく言えば「冒険遊び場」になります。「冒険遊び場」のほうがイメージしやすいのではないかと思います。自由に遊ぶことができる場、つまり遊びが選べること、子どもが本当に遊びを探して遊べる場ですね。遊んであげるのではなく、子どもがなるべく自然の中で自由に遊びを遊べるようにすることが大事なんです。子どもたちにとって、人の遊びを見ながら、いろんな遊びを少しずつやっていけるということがすごく必要なのではないかなと思うんです。でもその前に、禁止のない、自由に遊べる公園が欲しい、という願いがありましたから、2003年から冒険遊び場を少しずつやってきました。「外の子どもの居場所づくり」ですね。

**関戸 (T) :** 「プレーパーク」と「冒険遊び場」は日本では同じように使われているんですが、イギリスでは一般的に「adventure play ground」と呼ばれています。つまり「冒険遊び場」です。

日本で最初に始めたのは、東京都世田谷区の住民の方たちです。そのときに輸入されてきた言葉が「遊ぶ公園＝プレーパーク」という名前でした。日本ではそれが定着したことが、「冒険遊び場」と「プレーパーク」という呼び名が混在している理由です。日本全国で400ヶ所以上の冒険遊び場やプレーパークが運営されていますが、ほぼ9割以上は、地域のお父さんお母さんやシニアの人や若者が有志で任意団体やNPOをつくって運営しています。地域住民の運営がすべてではないんですが、その多くが2つの名称を使ったりしながら活動しています。

**紫牟田 :** 世田谷にプレーパークができたのは何年ですか。

**関戸 (T) :** 1975年に経堂にできたんですね。そのときはまだイベント型、夏休み限定でした。

**紫牟田 :** イベント型のプレーパークもあるんですね。

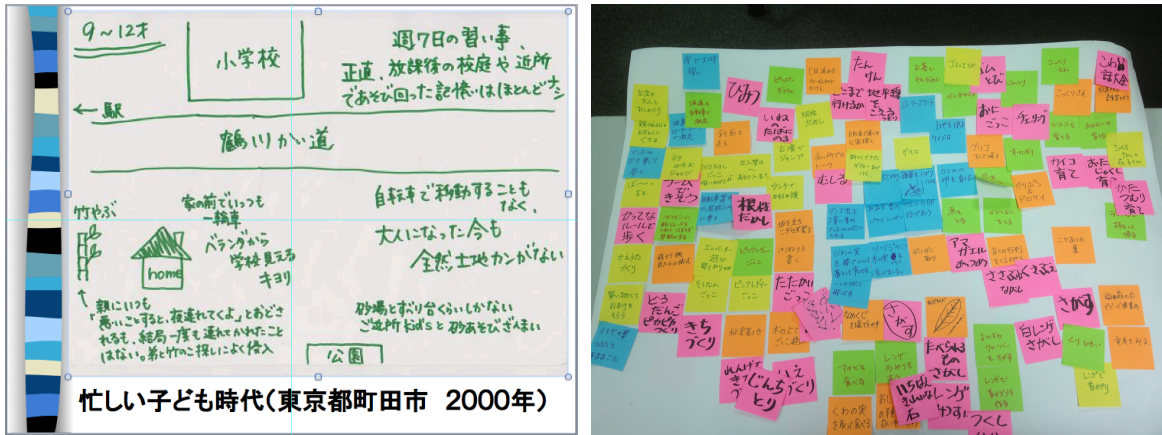
**関戸 (T) :** 全国400ヶ所のうちの1割ぐらいが常態的に日々開園しています。つまり、毎日遊べるプレーパークは1割程度で、東京都内が1番多いんですが、それ以外は、開催頻度はぐっと少ないですし、週に1回や月に1回みたいな活動形態のほうが圧倒的に多いです。

**嶋村 (T) :** 最初は世田谷でも3週間だけでしたが、子どもが主催者の家に「子どもは夏休みの3週間だけしか遊ぶわけじゃないよ」って言いに来た。「じゃあこれは1年通してやるしかないね」ってなったと聞いています。

**小水 (S) :** 渋谷の場合も、すでに世田谷で始まっていたので理解をしてもらいやすいといえばされやすい時代だったんですが、予算や安全への懸念がすごくあって、自分たちが責任を持ちますと言わない限りはなかなかできませんでした。ダメもとで始まったのが「せせらぎ冒険遊び場3days」で、期間限定でやるしかなかった。でも、すごくありがたいことに現在の区長である長谷部さんが区議として初当選をしたときにちょうど「せせらぎ」も始まり、長谷部さんがせせらぎに興味を持ってくださったんです。私たちが有志でやっていると言ったら、「こういうことを有志だけでやっているのはおかしい」と思って下さったことから少し道が広がっていったんです。というのも、当時「せせらぎ」は公園ではなく、スポーツセンター施設の端にある空きスペースで開催していました。スペースの傾斜がすごく可愛くて、いい具合に遊びやすいし、木が沢山あって、ここを使わせてもらえないかという話をしたら、スポーツセンターが理解を示してくださったんです。スポーツセンターでいろんな大会があるたびに、施設長が前区長を連れて来てくれて、「子どもたちってこのくらい腕白で、本当に怪我ぐらいどうってことないんだよ」って前区長が言ってくださったおかげで、細々と14年間続いています。

## 遊びが育む力とは

**嶋村 (T)** : なぜそもそも大人がプレーパークなどをつくり始めたのかという前段階の話をしませうね。TOKYO PLAYのワークショップでは、たまに「遊び地図」というのをやってもらいます。子ども時代にどこでなにをしていたかかを地図にして描いてもらいます。



TOKYO PLAYによるワークショップ「遊び地図」(左)と子どもの頃にやった遊びの抽出 資料提供: TOKYO PLAY

**嶋村 (T)** : ガラスの石集めとか貝殻集めとか、学校で縄跳びしたり、鬼ごっこしたり.....公園でも靴飛ばしが流行っていたり、おしゃべりする公園だったり、木の蔓のブランコがあって好きだとか栗拾いしたり、自転車乗り回したりとかね。その他に動物が出てきたりします。親に内緒で野良猫を飼っていたとか、スーパーに行くとき野良猫や野良犬が多かったとか。犬のいる家に、給食の残りのパンをあげていたとか、学校の用務員のおじさんお菓子をもらっていたり、おじいちゃんの友達の家でお菓子をもらっていたり.....

**紫牟田** : “おじいちゃんの友達” なんですわね。

**嶋村 (T)** : 基本的に近所をうろろして歩いて気が向いたらそこで遊ぶ。昔は遊ぶってこんなことだった。まち全体が遊び場だったんだと思います。新宿でも、お家では人形遊び、塾の帰りに雑誌を買う。「バカヤローの店」と書いてあったりしますが、これはお店の大人に「バカヤロー」って怒鳴って追いかけてきたら逃げるっていう遊び。あとピンポンダッシュもあって、こんなのをみて思うけれど、そもそも子どもって大人を喜ばせるために遊んでいるわけではないんですよ。大人になると、ついつい大人が喜ぶ遊びだけをして欲しいと思いがちなだけけど、実は怒らせることにツボがあったりします。無視されるとつまらない。大人の正しい反応は、怒って追いかけることだったりするのかな、と思います。朝礼台で漫才をしていたり、傘を裏にしていたり、いろんなことをしてますね。そもそもそのなかで子どもは限界を知ったり、まちの中に何があってそれが自分にとって何の意味があるかを知っていたんだと思うんです。一時期イギリスの政府のホームページに「遊びは子どもが自分の生きている世界を知る扉である」と書かれていたことがありましたが、遊ぶことで自分がこのまちに住んでいることを知っていたんです。

だから、豊かに子どもが育つまちというのは、「遊べるまちに決まってるじゃん！」と思って、「どんなことが面白かったですか？」を書いてもらったこともあったんです。「むしろ」というのがあったり、ウンチでお好み焼きとか、立ち入り禁止に敢えて入るとか、川口浩ごっことか.....くだらない、なんでもないことがおもしろかったんだと思います。大人はなんにも関わらないですよ。ダンゴムシを大量に集めて、マンホールに穴に入れるとか、ミミズを集めてバケツいっぱい、カエルの卵を投げあう、魚を獲る、カブトムシを捕る、アリの行列を狂わせる.....



大人になると子どもの遊ぶことをメニューで考えがちですが、メニューで考えるよりも子どもたちがやっている遊びは想像を超えて広くて深いのかなって思いました。けれども、そういう子ども時代をではなく、実は忙しい子ども時代を過ごしていた人もいます。週7日習い事、正直、放課後の校庭や近所で遊びまわった記憶はほとんどなし、という人もいます。だけこの子はおもしろいことに子どもの遊び場に6年間くらい関わっていたんです。子ども時代に遊んでなかったから、って。僕がいた川崎の遊び場で働いていたすごくいいスタッフだったんですけど、子ども時代、自転車で移動することがほとんどなかったから大人になっても全然土地勘がない。そういうこともありえるんです。

## 遊びがないとどうなるか

**嶋村 (T)** : 子どもたちが習い事で遊ぶ時間を取られてしまうことと、子どもの大好きなことばかりが禁止されていたりするんですね。良い子の約束「みんなで仲良く遊びましょう」……ここからして子どもたちは難しかったりするんですけど、「絶対遊具から飛び降りてはいけません」「乱暴に使ってはいけません」「ふざけてあそんではいけません」とか「割り込んではいけません」。

**紫牟田** : 「必ず靴を履いて遊びましょう」なんていうのもありますね (笑)。

**嶋村 (T)** : 公園で遊ばせているお母さんたちは、順番に並んだり、遊ぶことをどうやって教えるかにすごく苦労しています。ブランコ、滑り台、取り合いになるなかで、間髪入れずにうちの子がすみません！って絶妙のトーンとタイミングで入っていかないとその公園に居られない雰囲気があるんです。逆に、“謝りに行く場所だ”って割り切っているお母さんも逆にいたりするんです。あとは学校の放課後で、ジャングルジムは2段目まで、ブランコの立ち漕ぎは2年生から、ケガへの心配ですよ。

**紫牟田** : 小学校でこういう指導になっているんですか？

**嶋村 (T)** : そうですね。預かりの場として放課後児童クラブもありますが、ケガをさせたことがクレームに繋がること、つまり管理責任をどう乗り越えていくのかが問題になります。ここは会場のみなさんにもぜひ、考えてもらいたいところです。それが結果的に、子どもが遊ぶ場所や機会を奪っている大きな要因かなと思っています。逆に、それが災いして新たな問題も起こっています。例えば最近では、火に直接接触って火傷してしまう子が増えているという話があります。IH調理器の家も増えていて、火を見たことがないから。炭も熱いのに気づかず触ってしまうこともあります。子どもだけではなくて大人になっても。

**関戸 (T)** : ダンボールにしまっていた炭を出して遊び場で焚き火をしていたとき、あるお母さんが「ありがとうございます、片付けておきました」と言うんですね。何を片付けたのかなと思ったら、火のついた炭を元のダンボールの中にしまっていたんです。炎が見えないと火だとわからないのは現代の親の世代からもだんだん出てきていると思ってびっくりしましたが、すごくおっかないですね。

**嶋村 (T)** : 危ないことが普通にどんどん出てきています。先日、バレエの先生が、「幼児期にあまり体をいろいろ動かしてないから、つま先で立てなくて、そもそもレッスンにならない」と言っていました。また、異年齢の関係で遊んでないから、小さい子が何かをしたときに小学生が本気でやり返してしまったりする。「だるまさんがころんだ」をやるとき、一人孤立して鬼になることが怖くて、鬼は全部先生がやってあげたりするという話もあります。鬼になることは実は孤立するという怖い体験だけれど、遊んでいるうちにそれが体験できたりすることもあるし、逆に鬼になりたい子どもたちもいるよね。鬼になっても転機がきます。いつまでも鬼でいられない。人生の転

機ではないけど、いくら孤立していても絶対に変わる瞬間がある——そんなことを知らず知らずに学んでいたりするのかなということ、いま、どんどん遠ざけてしまっていることで逆効果になっているのではないかと思います。

**関戸 (T) :** 小学生に「すみません、スタッフの人ですか？蚊がきました。どうかしてください」と言われたことがあります。サービスされる遊び場にしか行ったことがないから、自分でなんとかするという発想が全くないんですね。

**紫牟田 :** ちょっと背筋が寒くなりました。生きる基本的な能力を、遊ばなかったことで削がれてしまっているような事例ですね。

**小水 (S) :** “削がれてしまいがち”ですね。大人でも「遊び心を大事にしたい」という話はよく聞きますが、子どもが遊ぶということを、遊ばせてあげなければとできないと思っている方がきっと多いんだと思うんです。遊びというのは、何かを一所懸命、夢中になっていることを言うのではないかと思います。子どもを離してあげて、何に興味を持ち、どこに走って行くか、何を手に持つのか、そこからどうするのか。他の子が遊んでいる様子を見たりしながらですから、遊びになっていくには少し時間がかかる。テキスト通りにはいかないんです。でも自分で見つける楽しさなどを得ることができる時間や場所が必要なのではないかととても思います。

今朝の新聞に、虫を捕まえた後にどうすればいいのかを書いた本の広告が載っていました。虫を触れられない子もすごく多いし、傷んだ生き物に対してどうすればいいかわからなくて、ただかわいそうっていうだけになってしまう。じっくり見守る時間がすごく減っているから、豊かな時間を少しでも持てるようになっていくためには、やっぱり遊べる環境をつくっていくことはきっと必要なんですよ。遊び場みたいな、限定された場所でも。TOKYO PLAYが道でいろんなことをやっているように、私たちが小さい頃はどこでも遊び場だったんです。要するに“遊べる”というその力がすごく大事なんですが、いまはちょっと後ろから押してあげないと、「ここで遊んでいいの？」「こんなことしていいの？」って逆に聞かれたりもする。責任とか、怒られるとかを子どもがすごく心配しているんです。昨日見た親子は、「アリに触っちゃだめよ！ほら、ヒアリが」という会話をしているんです。いま、そういうふうに全部を閉じてしまうという怖さがすごくあると思っていますね。うろろろすることは必要なのではないかなと思います。

**入江 (S) :** 人間が本来生まれついて持っているものを育てず、消していつてしまっているのが、いまの子どもの環境ではないかと思うんです。そもそもプレーパークができたきっかけが第二次世界大戦中のデンマークですよ。廃材置き場で子どもが生き生きと遊んでいるのを見た大人が、「子どもってこういうものだ」と気づいて、わざわざ整わない遊び場をつくったものが「プレーパーク」なんです。だから「冒険遊び場」なんですよ。もともと人間が持っている「遊びたい」という気持ちは、先ほど嶋村さんが紹介してくれたような、本当に「えーっ!？」というような、大人になっていく過程で捨てていくものが、子どもの遊びなんだと思います。だから、もともと持っているものを育てていつて、想像力や生きる力をより強固にして、強い大人になって欲しいと、活動をやっていると思います。大人が環境を整えることで奪ってきってしまったのではないかと感じていて、改めて子どもたちに「ごめんなさい」と。大人が奪ってしまったあなたたちが人として育つべき生まれてきてもともと持っている権利をもう一度ちゃんと整えてあげたい。そうしないとといけないような時代になってしまったんだという感じがしています。

**嶋村 (T) :** 子どもが遊べなくなっているということは、第一生命の調査でも出てきています。「親の時代がいまの子どもより外で遊んでいたと思う」と感じているのは8割超えているといいます。ただでさえ、遊べなくなっているということと、あとは子どもが忙しい。

**小水 (S) :** 逆に言うと、合間合間ですごく上手に遊べるようになっているんですよ。遊びの質も変わってきているから一概には言えないんですけど、「遊ばないと子どもじゃない」というイメー

子どもがすごく疲弊しているイメージも、大人が持っているだけだと思うところもあります。子どもと大人がどこでもちゃんと向き合って、一緒に遊んだり会話したりしていれば、違うのではないかと思います。

## 子どもが遊べる環境をつくることは大人の責任

**小水 (S) :** 冒険遊び場は限られたスペースですが、まちを遊ぶことは必要ですね。代々木公園の自主保育の初期の頃は「街頭保育」というやりかたがありました。みんなでリュックを背負って行き先もなく、とにかくまちを歩いてみる。工事中のおじさんに話しかけてみたり、原宿ですから綺麗なショーウィンドウをベタベタして逃げたり、ちょっとした段を上がったたり降りたりして、食べれそうなところを見つけてお弁当を食べて帰る。本当に面白いんですね、まちって。立ち止まったり横道に逸れたりいろんな触ってはいけないものを触ったりしながら、渋谷を子どもたちは体感したと思います。こういうことをもっとやればいいなとすごく思います。「(目的地に)早く行きましょう」というだけではなく、お散歩のように余裕をもって、行き先まで時間をかけるというのは子どもにとって発見が多いと思うんです。遊びとは、ある意味“発見”ですから。

**高橋 (T) :** そういうことが実はやりにくくなっている世の中になっているという話で、私も冒険遊び場のスタッフを経ているんですが、いまでも冒険遊び場やそれ以外のお母さんたちのお話聞いているとプレーパークや冒険遊び場では花を摘んで、蜜を吸うことができるけれども、他の公園ではできないと言われるんです。ショーウィンドウをペタペタ触って「こらっ！」と言われることも子どもだけでなく、子育てをしているみなさんへの社会からのプレッシャーがものすごく強くなっていると現場に立っていて感じるんですが、実際、小学生の子育てをしている母親として山田さんはいかがですか。

**山田 (S) :** 私はいま小学校の子を育てています。小水さん同様、代々木公園で同じく自主保育をしていましたが、手ぬぐいを木にかけるとおじさんに「かけないで下さい」、木を登っていると「登らないでください」、水で遊んでいると知らない人から「水がもったいないじゃないか」って言われるんです。そのなかで隙間を縫って遊んでました。マンションのエントランスで子どもが鬼ごっこしていると管理組合に「子どもは遊ばないでください」と言われる。本当に遊ぶのに苦労したんですよ。新宿と渋谷の境目にある、おじさんがタバコ吸っているような寂れた公園でブランコに2人で乗って遊んでいると、横を通った高校生カップルが「子どもをこんなところで遊ばせているの？かわいそう」って言って通り過ぎていく。「ああ、かわいそうなんだ、私」って、でもここしかないんだけど、ということの積み重ねでした。「意地でも素敵な遊び場を見つけてやる！」みたいな感じでまちなかを歩いたりしましたが、なかなか伸び伸びとは遊べなかったです。どうしたものかと本当に思って辿り着いたところが自主保育でした。やっとそこで息ができる経験ができた。自主保育の頃は、雨の日も雪の日もカッパを着て外で遊ぶんですよ。まだ子育ての完成形ではないし終わりはないと思っているんですが、息苦しさを共有できる仲間がたくさん居るし、そのおかげで「すみません！」と言う回数がすごく少なくなりました。押し車の奪い合いで「すみません！」と言い、順番を抜かして「すみません！」と言い、おもちゃとって「すみません！」と親同士が言い、とても気を使いあっていました。ベビーカーを押して乗る満員電車の中では「子ども連れていてごめんなさい！」という気持ちになりました。聞くところによると、ある学校で「1年生は登り棒の赤いラインまでしか登ってはいけません」というところがあります。でも運動神経が良い子は登ってしまう。登ってしまうと「何で、お前は登ったんだ」って怒られて連帯責任でみんなお休みがなくなってしまうということがあったそうなんです。



**紫牟田**：なんだかとっても息苦しくなってきました。

**入江 (S)**：私の子育ての頃も、全くそういうことがなかったわけではありません。ただ、子どもに禁止はあっても一緒にいる親たちは多分止めなかったと思うんですよ。私の時代も代々木公園で野草を採っていると「こんな親がいるからろくな子に育たないんだ」って横切っていく人がやっぱりいました。そのおじさんを追いかけて行って「ちょっと、待ってください。私たち渋谷で子育てしなきゃならないなかで、やっと見つけた数本——実はもっと沢山採るんですが（笑）——くらいをそんなふうには言わないでください、少しお話ししましょうよ」って言ったら「いいよいいよ、わかったわかった」って逃げられたんです。でもそこで黙って悔しがっていたら家に帰って旦那に八つ当たりしてしまうので、言います（笑）。いまでもそういうことはたくさんあるけれど、学校でもたぶん、先生たちも悩みながらやっているの、「それってどうなの？いいの？」といちいち立ち止まって、一緒に考えようという問題提起をもっと声に出していかなければならない時代なんだと思います。

「子どもたちは放っておいても育つもんだ」ってプレーパークにくるおじさんたちも言うんですが、「いや、そういう時代ではないですよ」と言わなきゃいけない時代だからこそ、冒険遊び場をつくり、大人がみんなと言っていかなきゃいけないと思いました。私も子どもが4人いて電車に乗るたびに周りから白い目で見られたりしたので、山田さんのお話にはすごく共感できます。子どもたちがちゃんと育ち、人が暮らす環境——私たちが幸せになるために必要なことを声に出していかなければならない。東京の道は車が通るものだと思っていたからTOKYO PLAYのみなさんの話を聞いて「みちあそびして良いんだ！」と言わなきゃいけないという気持ちになってきています。

**小水 (S)**：私たちは、はるばる羽根木公園まで電車に乗って行き、帰りにくたくたになった子どもたちを連れて帰って来る、という子育ての経験をしているから、渋谷にひとつでも良いから冒険遊び場が欲しいということが願いだっただけです。本当に禁止のないところで自由に子どもたちが時間を持てるということ、そんな場所を勝ち取る、というと大げさですが、整えてあげられることは大人の仕事なのではないかと思っています。整えた上で、そこにどうぞというように子どもたちが登場する。そういうかたちをいろんなところでたくさんつくりたい。渋谷で常設が1つ、季節で1つ、毎週日曜にやっているところが1つ、13年経ってもこの程度しかできなかった。でも、拠点がある程度できたのでプレーパーク同士や施設と繋いだりできたら、子どもたちがどこでも遊んでいくことができるかもしれない。そのような広がりを考えていく時期に来たと思っているんです。港区とか新宿区とかの境目もなく繋がり、子どもの世界が広がっていくことが、そろそろ次の大人の役割かなと感じています。

## 遊び場づくりとは、遊び場づくり遊びである

**紫牟田**：プレーパークというと、自然のなかで遊ぶ場という印象もあるのですが、必ずしも都市の中で“自然を体験できる場”という意味ではないと考えていいのですよね。

**嶋村**：ですね。何でも良いのかなって、

**小水 (S)**：ただ、やっぱり土の触感や木漏れ日を感じるとか、自然があれば遊びも広がります。もちろん感性も広がるけれど、水があり、土があり、木があり、草があり、生き物がいたり要素が多いほど良い。自然は基本的にあると良いなとすごく思います。ずっと穴を掘っている子もいるんです。



渋谷はるのおがわプレーパークで遊ぶ子どもたち 資料提供：渋谷の遊び場を考える会

**山田 (S)**：土を掘りに来ましたという子どもがいて、シャベルの奪い合いなんです。土が硬くて、よそでは掘れないんです。

**小水 (S)**：はるプレでも毎年、年度末に土を入れているんですよ。良い土を。子どもはやっぱり、握ったり、掘ったり、ぶついたり、土はいろんなかたちになるから。原点は泥んこ遊びではないかなって、すごく思いますね。

**嶋村 (T)**：最近、図工の课外授業でプレーパークに来た学校があって、素材に触れるというという単元があるんだけど、いきなり粘土を渡す前にまず子どもたちを泥だらけにしようって、半日まるまる遊ぶという、そういう素晴らしい校長先生がいる学校がありますね。

**関戸 (T)**：遊び場づくりの素材としてなぜ自然があると良いかということ、子どもが扱いやすいからです。遊び場づくりとして、プレーパークでもみちあそびでも、子どもの手で環境を変えることが容易であることが大事です。コンクリート打ちっ放しでは、環境を変えることができない。遊び場づくりは、子ども自身が手を加えて、自分の遊び場を変えていくことができる、自分で遊びをつくり出すことができるというところを大事なキーワードにしながら、いろんなかたちの遊び場をつくっていつているのだろうと思います。もちろん自然があれば容易にできるけれども、道路も駅前商店街も、限られた環境ではあるけれども子どもたちがどうしたら遊びをつくれるだろうという視点でいろんな素材を用意しています。用意した素材を使っていくのは遊びのプロの子どもたち。環境と素材だけを用意すれば、いくらでも展開するのだからよく感じますね。子どもたちは自分たちが予想もしなかった使い方、遊びをつくっていく。

**高橋 (T)**：一方で、逆にそれがなければ遊べないのかというわけではない。大人が土を用意しないとそこは遊び場ではないとなってしまうと、またおかしな話になってしまいます。僕は、「そこにあるものでいかに遊べるのか」という視点を持ち続けていかないと思っていますね。環境づくりと子どもが自立して遊ぶ力——このバランスは大事にしたいと思っています。

**嶋村 (T)**：何をやるかということと同時に、どうやってするかということもあると思います。例えば、子どもたちがベンチをつくっている。薄っぺらい板によくぞ立った、という6本の棒があって、このあとこれをひっくり返して3人は座るんですね。どうなると思います？

**紫牟田**：6本の細い棒では支えられないから、壊れたかな？

**嶋村 (T)** : みなさんだったらどのタイミングでどんな声かけをしますか？もしくは全く声かけないか。現代では、つついもてなしてもらってしまうことが多いし、失敗せずにいかに最短の時間でできるかというプログラム化した体験というのをこれでもかと詰め込まれてしまうんだけど、失敗して放っておいてもらうという時間も大切なのだと思うところがあります。教育では、傾いて倒れるということが許せなかったりするのかもしれないけど、ベンチをつくるということが大切なのではなく、この時代に子どもたちがどういうふうにいるんなことをやるチャンスがあるのかというところが大きいのかなと思います。

**山田 (S)** : 何かをやるときに、先に大人に聞く子が本当に多いんです。「お母さん、次、僕は何すればいいの？」って聞くんです。「何やっても、ダメって言うから聞くの」って言うんです。公園でも「これやってもいいですか？」声かけられることが多くて、自分で考えなさいという割には、その隙を与えられてないのかなということ、自分自身にも問いかけつつも実感することがあります。

**関戸 (T)** : 昨日、小学生に水鉄砲かける前に「かけてもいいですか？」って言われて、「お前、それ聞いたらお終いだよ」って(笑)。聞かれたら嫌に決まっているじゃん。そういうことは後ろからニヤニヤしながらビューってするんですけどね、今の子どもたちは聞いてくるんです。俺に聞いてそれどうするの？やれば良いじゃないって思うんですけど、聞いてきますね。

**嶋村 (T)** : いまの時代、イタズラということが一番難しい技術なんだよね。相手がびっくりしてくれたり、怒ってくれたりしないとつまらない。本当に洒落にならないことをやって炎上することがあるけど、あれとびっくりするくらいの中間くらいをいってもらわないと困るんだよね。それが、遊んでいるうちにだんだんわかってくると思う。

**高橋 (T)** : 落とし穴を掘っていて、わざわざ「目をつむってこっち来て」って落とそうという子たちもいる。

**嶋村 (T)** : 人間は幅が必要だって言われたことがあるけど、なんでもない人もいれば凶悪の人もいて、その両方を知っているから“ちょうど良い”が分かってくることもある。

**入江 (S)** : 先ほどの椅子の話ですけどね、プレーパークで見ていると、大体この状態でお父さんが手を出しますね。あとは近所のおじさんが教えたがります。自分の力を発揮できる場所というのはその人たちにとっても楽しみなんだろうけど、子どもの本当のびっくりする、これをできあがった！って喜んで乗ってみるとなんだか傾いてくる面白さというところは体験できないで終わってしまう。子育ての最初の頃は、私なんか子どもたちにできるだけ効率よく身につけさせたいと思うんです。でもこういう活動しているなかで、その先にある面白さというのはもっと面白いということに気がついてしまったから、できるだけそばに行かないで、じーっと見えています。プレーリーダーをやってこられたTOKYO PLAYのみなさんはどんなふうに思いますか？

**林 (T)** : 実は、私もはるプレで育ちました。6年間勤めていたんですけど、難しかったですね。ツリーハウスをつくったとき、子どもたちがトンカチやノコギリを持ってワイワイやっていたところにお父さんがやってきて板をのせてあげようとしたんです。私は自分たちでやらせたいなと思って、お父さんを止めたんです。ムッとされましたけど、いまはゆっくり近寄りながら「ちょっと見守りましょうか」という感じで、まず心を開いてもらわないとしょうがないというのは若い頃、実感させてもらった経験です。

**嶋村 (T)** : 本当は大人も遊べたほうがいいですよ。子どもが遊ぶことを守るためには、大人もその間、別に遊んでもらうっていう……。

**紫牟田** : 大人も「お父さんすげえ」って言われる場所が意外と少ない。

**関戸 (T)** : 遊び場づくりは子どもにとってはその場でつくれる遊びが面白いけれど、私がこの仕事で1番大事だと思うのは、そこに関わる大人が「遊び場づくり遊び」ができることだと思ってい



ます。昔は地域のなかに仕事と生業があったと言われていて、私が子どもの頃も、子ども会の活動を親が手伝っていました。昔は生業は食べるためのこと、仕事は地域に奉仕することと使い分けをしていたけれど、仕事がいわゆる稼ぐことになりましたから、地域のことを無償でやって輝き楽しんでいる大人の姿を、全然見てきていない世代も多いなと思うんです。私は「遊び場づくり遊び」ということは、まさに昔でいう仕事の部分だと思うんです。特にそこで稼ぎはしないけど、大人が一生懸命楽しみながらやってほしい。子どもと遊んでいる瞬間や「遊び場づくり遊び」という仕事のあとにある大人だけの一杯の瞬間が本当の楽しみだっというと思うのだけど、それだけではなく大人として生き生きと生きている瞬間を楽しめる。そういう瞬間をつくれたらいいなと思います。来ている大人たちに自分の何かを見つけて欲しい。そんな気持ちで関わったりしています。

## 海外の子どもの遊び場事情

**左京：**冒険遊び場が日本では400ヶ所あるけれど常設は1割、あるいは、はるプレのこれまでの運営に関しても、なかなか継続してできないということなど、その運営での困難や大変さも下打ち合わせでうかがいしましたが、はるプレ運営の現状も紹介していただけませんか。また、プレーパークというものを日本そして世界では誰がどのように運営しているのかを教えてくださいませんか。

**嶋村（T）：**デンマークでは最初、「廃材遊び場（junk play ground）」と呼ばれていました。デンマークからその後ロンドンに広がっていくんですが、やっぱり地域の人たちが立ち上がったんですね。行政の人がやってしまうと何か言ったら、すぐ看板などがでてしまう。住民たちの自主独立、自分たちの住んでいるまちを自分たちで何とかしようというところが大きいです。ただ、あまりにも「ジャンク」という名称が悪いので「アドベンチャー」に変わりました。地域の人たちが、子どもたちを何とかしようよ、という流れがとても大きいですね。

**紫牟田：**地域の問題として捉えようということが基本なんですね。

**嶋村（T）：**そうですね。行政ができないわけではないけど、役割が違うというところが大きいかなと思います。ドイツでは「adventuer spielplatz（アドベントイヤー・シュピールプラッツ）」と言うんです。ここには「全ての子どもが遊びに来ることができます」「赤くても黄色くても白くても黒くても太くても痩せても、デカでもチビでも」と書いてあります。



ドイツの冒険遊び場（adventuer spielplatz）（左）、ベルリンの壁にはさまれた軍事境界線上にあった緑地帯で新しくつくられた冒険遊び場 資料提供：TOKYO PLAY

来ている子供たちは本当にさまざまです。ドイツでは建築遊び場が結構あって住民参加を大事にしながら、住民の自主運営というよりNPOとしてやっていく団体が意外と増えていきます。住民の自主運営だと限界が来てしまうんです。

**紫牟田**：自主運営だとボランティアになり、継続できにくいということでしょうか。

**嶋村（T）**：そうですね。共働きもしなくてはいけないという話もありますからね。だけど、ドイツや北欧は子どもたちに大切なものは税金で賄うという意識があったり、イギリスでは草の根のボランティアを助成金で賄っていったりということがあります。ヨーロッパの中でも文化は異なりますが、市民参画型、常に地域の人に参加できるようにしています。提供者と受益者がいるサービスというより、一緒につくっていくということは日本でもこれからキーになっていくと思います。こんなふうに建築遊びがすごく、女の子たちが建てた「ガールズクラブ」なんて書いてあったりします。中高生向けの自転車改造部品専用倉庫みたいなものもありますね。

**紫牟田**：というと、中高生たちが遊びにくるわけですか。

**嶋村（T）**：18歳くらいの子たちも来ます。ここでパーツを取り替えたり、錆止めみたいなのをひたすら噴射していたり、そんなような遊びをしていました。ベルリンの壁があったところにつくられた冒険遊び場もあります。平均台の上に乗ってズダ袋に入れた砂を振り回して相手を落とし合うみたいな遊びや、動物を飼ってたりしています。「糞の臭いの苦情はないんですか？」と聞いたら、「全くありません。何言っているんですか？」って言われました。まあ、乾燥しているからということもあると思うんですが、動物を飼うということは日本の都市の子どもたちにとって一番欠けている要素だと思います。あとは年齢の高い子どもたちは自分たちで、スケボーのハーフパイプをつくってしまおうということもあったり……。



資料提供：TOKYO PLAY

**紫牟田**：ハーフパイプもすべて自分たちでつくったんでしょうか。

**嶋村（T）**：自分たちでつくったと言っていましたね。お膳立てしたものをはいどうぞというよりは、子どもたちが自分で大人と一緒に作り上げていくということもできたりします。イギリスは歴史が古くて、第二次世界大戦で爆撃された瓦礫で遊ぶということもあって、生き埋めになって亡くなってしまう子どもが多かったそうです。そういうなかで「どんな危ないことをしてもいいから、死なないで欲しい」という親の願いからこういう遊び場も出てきました。

だから、結構危険な遊びができるようになっていたような気がしますね。ロンドンオリンピックで使っていた公園の会場にあった滑り台を譲り受けたところもあります。ここも地域の人が入っている遊び場です。

でも、地域コミュニティは海外でも希薄になってきているそうです。これは世界的流れかもしれないけれど、虐待問題や親に口を出してしまうとか、隣の人とのコミュニケーションが取れなくなってきているということから、大人対応することが面倒臭いと思う大人がどんどん増えてきているんです。そうすると子どもだけの場所にしてしまえ！という流れが生まれていたりします。ロンドンは多民族がいるのでこの遊び場だけでも48カ国の子どもたちが来ています。海外の遊び場は、「この街ではこれ以上のスリル味わえない！」というくらいのストレス発散の遊びかたをしていると思いますね。

僕らが会ったロンドンのプレーワーカーのひとは、最近イラクの遊び場を手伝いに行っていたそうです。イランイラク戦争のとき、化学兵器で1日に5000人亡くなったハラブジャというまちです。レバノンでも子どもたちは公園にぬいぐるみとかサッカーボールに見せかけた地雷が置いてあるそうで、こういう場所でも埋まっている地雷から爆薬を取り出して、川に放り投げて爆発させて魚を採ったりしている。足が吹き飛ばされてしまったりしてしまう子があるので、ロンドンの最初の頃のように「危ないことはしてもいいから死なないで欲しい」ということがやっぱり遊び場づくりのきっかけになっています。日本とはまた別の感じがありますね。

## プレーパークの運営

**嶋村 (T)** : 日本の運営方法についてですが、住民組織でやっていると限界があります。児童館は児童福祉法で規定されていますが、冒険遊び場はされていません。だけど、草の根運動のなかで毎日開けたいとなったときは、行政のどこかで位置付けられます。でも、危険管理の問題があったりするので、二の足を踏む人たちが出てきてしまう。また、資金源がどうしても足りないですね。

**関戸 (T)** : でも、近年では子どもの遊び場づくりを行政課題として取り組む傾向が、都内を中心に比較的増えてきています。これまでの遊び場づくりは、行政がお金を出さずに住民がボランティアでやっていることが多かったんですが、二極化しているとも思うんです。いま現在も関心を示さず、自分たちは子どもたちの福祉や命を守るということで手がいっぱいなので、手が出せないという行政もいれば、自分たちのまちの課題として、地域再生と位置付けて遊び場をキーワードに取り入れているところもちょこちょこあります。

**山田 (S)** : はるプレには、全国の行政の視察が多くなってきている印象がありますね。

**入江 (S)** : はるプレは区からの委託事業ということで予算をいただいている、プレーリーダーを雇ったりする運営資金はすべて賄っています。他の市町村では、教育環境と一緒にやっているところが多いのですが、珍しく公園課の管轄です。

**高橋 (T)** : その前になぜ運営にお金がかかるか、ということがあります。行政の人たちと一緒にやらなくてはいけない理由も。

**小水 (S)** : プレーパークには、プレーリーダーという若い人々がいます。プレーリーダーは子どもたちに寄り添いながら、元気よく遊べるように、常設のところには常駐しています。プレーリーダーを雇用するにはまずお金がかかります。決して充分とはいえませんが、行政と一緒にやることで、基本的なところが保証されます。そして、メンテナンスがあります。屋外ですから雨風で消耗したり老朽化してしまうんですね。毎年少しずつ土を入れたりするのにお金がかかります。渋谷区ではそれを子どもたちのために予算化して下さって、事業として成立していることは全国では珍しく、ありがたい話で私たちは粛々と無駄遣いをしないように使わせて頂いております。そうはいっても、足りないんですけどね。



**入江 (S) :** 「何で子どもの遊びにお金がかかるんだ」と近隣からは言われたりしていました。でもこれまでずっと話してきたように、子どもたちが育つ環境をつくらなければならないこの時代に必要だということを理解してもらうためにも、情報を発信したりしなくてははいけません。活動記録を毎年つくって、あちこちに配布したりホームページをつくるなどの周知活動をもやっていたらなければならない。どうしても人を雇うためのお金はこの活動に必要なだと思っています。

**嶋村 (T) :** また、地域の子どもの遊ぶ環境は大事だということを伝えるための拠点だったりするんですね。拠点がしっかりと保証されていることでまち全体に、遊ぶことが大事であること、こんなふうに遊べるって大事だよねということで、いろんな人に来てもらう。そういう調整役をプレイヤーは果たしていると思っています。

## 遊び場を保証する仕組みとは

**紫牟田 :** 以前、嶋村さんに遊び場確保が法的に保証されている国があるというお話を聞いたのですがそのことについて、教えていただけませんか。

**嶋村 (T) :** いま、唯一国として法律を持っているのはイギリスのウェールズというところですね。2008年に「Play Policy」と「Implementation Plan」という世界初の行動計画を政府が作りました。子どもの遊び環境について政府がこう動くとか、政府・自治体・教育機関の役割とは何かとか、現状をどう変えたらいいかななどを定め、その後、行動計画がどう守られているのかというのを示すために自治体の遊び方環境の充実をきちんとしているかどうかのチェックを義務付けたんです。

それで、遊び環境が充実しているかを子どもたちや住民にヒアリングをしています。遊び場の数だけではなく、例えば本当は子どもは子どもと遊べたほうがいいはずなんです、そういう全体的な環境も含めて、数値評価が行われています。ウェールズは住民が300万人という小さい国ですが、小さいからこそその機動力を持ってこういう仕組みづくりをしていて、イギリスではこの仕組みをイングランドが真似し、スコットランドが真似し、と広がっていくんです。2008年でウェールズでつくられた行動計画も、数年後にイングランドが真似しています。350ある自治体が「子どもの遊びに関する環境整備の方針をつくってください」「つくったら予算を出します」という流れで9割方の自治体が環境整備の方針をつくっていきました。日本で次に進むとしたら、草の根という時代をどう越えていくかということの意味では、いかにきちんと保証するかというこちらのほうにヒントはあるのかなと思います。

**左京 :** 市民からすると国レベルでは少し遠いと思うんですが、直接関われる基礎自治体、ここでは渋谷区に、こういう取り組みがあったらいいなということは分かります。直接分かりやすい課題があるとえば働きかけやすいし、行政としてもやる理由として説明しやすいと思います。でも、実現するための理由付けが難しかったりする。行政のどこのものと位置付けて実現していくと可能性が高いでしょうか。

**嶋村 (T) :** さまざまな切り口があります。地方では里山保全の部署がやっているところもありますし、子ども青少年課がやったり、都市計画課がやっていたりしますが、横断的にやれる自治体が出てくるともつといいですね。

**左京 :** 現状では、どういう部署が推進しているところが一番広がっている筋でしょうか。

**嶋村 :** 子ども系、公園系が多いです。特色のある公園づくりという切り口で入ってきたりもしますね。

**関戸 (T) :** ここ数年、増えたなと思う事例には、放課後の居場所対策があります。保育園の待機問題が数年前から話題になっていますが、この問題はそのまま上にシフトするわけです。保育園か

ら学童保育になっても親は共働きのままですから、放課後の居場所として学童クラブや放課後クラブがあるわけなのですが、満杯なんです。そこで地域の中に移行して居場所をつくりましょうという話のなかに遊び場の機能を位置づけて、予算をつける。また、一部では子育て支援です。子育てでは幼児期から屋外に出て人と繋がっていかないと、親が孤立する「孤育て」に陥ってしまいます。室内型の子育て支援拠点は広がっていて、どの自治体でも屋内型は持っているんですが、子育て支援の意味的を持つ乳幼児期の親子が集まれる屋外型を持っていないことがあります。放課後の居場所づくりと「孤育て」を防ぐ屋外型子育て支援——このふたつが比較的トレンドと言えるかもしれません。

**嶋村（T）**：子どもの遊びを環境問題として捉えれば、大気汚染アセスメントがあるように子どもの遊びの環境アセスメントがあってもいいと思っています。そのなかで課を越えてできることをそれぞれがやっていく。

**小水（S）**：場所的に言えば、はるプレは代々木公園の隣にあるので、一時避難場所というかたちになります。要するに防災拠点にもならなきゃいけない。何かあったときにいろんなことに活用できる大切な場所なのではないかなと思います。

私たちの展望としては、予算をつけて事業化していただいているんですが、プレーリーダーがプレーワークをする環境としては、アルバイトに毛が生えたような状態をお願いをする状況でしかなく、保障も考えていかないと長く働いてもらえないことを解消していきたいとずっと思っています。単年度契約が基本だというのも不安材料ではあります。子どもたちが育つために外遊びが大事であることを真に思うのであれば、仕事がしやすい環境にもしないといけない。だから、小学校や公園などで出張プレーパークなどを行ってプレーパークの意義を知ってもらうきっかけをつくりながら、すべての地区にできるようになればと願っています。

## 遊びはまちをつなぐ

**高橋（T）**：先に、解決は“外”にあるという話を嶋村がしていましたが、子どもの遊びを子どもの遊びだけで解決するというわけではなく、地域の中で子どもが育っていくこと自体が地域をつくっていくことにつながっていると思います。関戸が話した「つくることを遊ぶこと」自体がまちをつくっていくことです。そんなまちの中で子どもが育っていくことが大事です。行政の課や部の壁の間を縫って繋いでいくことが、我々市民のできる役割分担だと思います。どうやっていくかを我々市民側が考えて提案するだけでなく、実際にやってくれるかどうかを結構やらなくてはいけない。プレーリーダーの職にはそういう役割も求められている。どうやってみんなでまちの中で子どもを見守っていくかを考えられるか、という話だと思います。

**紫牟田**：プレーリーダーがこどもの遊びを通じて、まちと人をつなげるということですか。

**嶋村（T）**：というのもあるとは思いますが、プレーパークの大切さの一方で、普通の人が担える役割をもっともっと増やしていくことを考えています。というのも国税調査14歳からの子ども1人あたりの人数を計算すると、1920年は子ども一人あたり大人が1.47人しかいなかった。それが1970年になると倍に増え、2011年には4倍になり、2060年には大人8人に子ども1人となる。こうなったときには、少数の専門家の大人がひとつの場所に子どもを囲って面倒見ている場合ではないと思うんですよ。もっともっと、子どもと関係ない大人が「まちの中で子どもの遊ぶ姿って良いね」ということがわかるようにするには、もっとまちの中に出していかなければならない。普通の、なんでもないおじちゃんおばちゃんが活躍できるような世の中にしていけないと、2060年は大変なことになるだろうと思っています。

そうするためには「道」がいいなと思っています。昔は当たり前だった風景ですが、ロンドンでは、こんなふうに月に1回2時間くらい道を止めて、車が行き交うだけの道を子どもたちの遊び場や近所の交流の場所にする取り組みがあります。

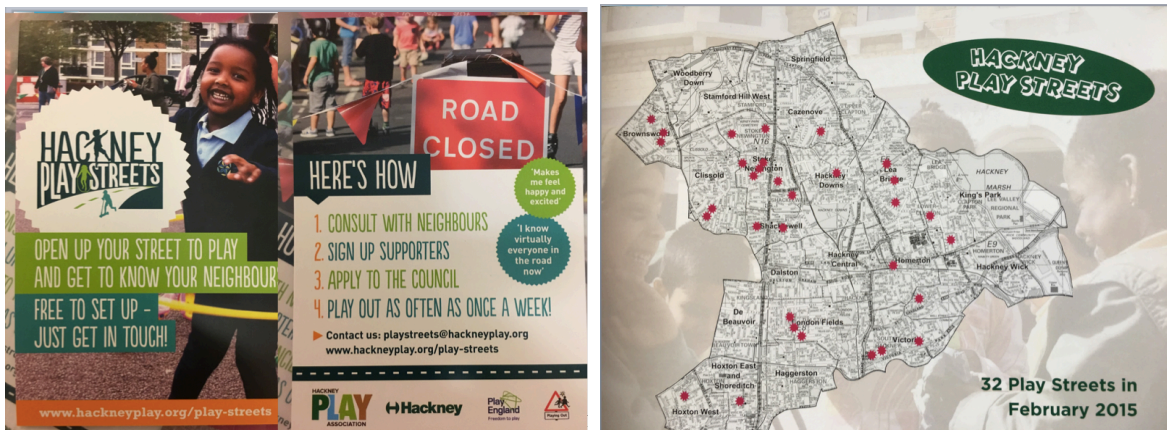
ロンドンは駐車場がないので、路肩が駐車スペースですが、路上駐車しているところに背の低い子どもが横切ろうとした本当に危ない。そこをこんなふうに遊べるようにしているんです。写真では、お父さんが縄跳びを回していたりしていますが、この風景だけで地域が変わるって言っていました。



資料提供：TOKYO PLAY

子どもがいる家庭同士は仲良くなるけど、子どものいない家庭の人と子どものいる家庭の人が話ができる場所って道路なんですよ。子どもも異年齢で繋がるし、大人と子どもで斜めの関係も繋がるし、いままで車のものだった道路が住んでいる人たちのものなんだ、という可能性が出てくる。子どもたちだけでゴーカートレースをやっている坂の下のクラッシュゾーンを子どもたちが自分たちでつくったり、砂を持ってきてビーチのようにしているところもあるし、奇数番地VS偶数番地で綱引きやったりしていたりします。大人も遊ぶ。子どもも遊ぶ。ロンドン北部のハックニーというエリアでは区として推進していて、自分たちの通りを遊び場に解放する場所が32ヶ所あります。「近所と仲良くなりましょう！やるのはタダです、ご連絡を！」と区が呼びかけてやりたい人を募集しています。





資料提供：TOKYO PLAY

**入江 (S) :** 広さはどれくらいですか。

**嶋村 (T) :** 広さは港区や北区と同じくらいなので、18~20km<sup>2</sup>くらいですね。図のように広がっています。もしかすると、渋谷区でやっている「おとなりサンデー」と繋がる可能性がすごくあるのではと思います。最初は道を止めるための相談をし合っていたのに「うちの水道が壊れてしまったんだけど、いい水道屋さん知らない？」などというやりとりがまちの中で生まれていく。そういうことの大切さがあると思っています。三鷹など、日本でもできないかといういろいろやったりします。

**紫牟田 :** 三鷹でのみちあそびは、市と協力してやっているんですか。

**嶋村 (T) :** 駅前商店街とやりました。三鷹には絵本の専門図書館があって、その企画で、まちなか絵本展をやろうと、いろいろなお店の店頭で商売にちなんだ絵本を置いた。お花さんだったら花の絵本、魚屋さんだったら魚の絵本を読める。子どもが道路にチョークで描いた絵を消しているとき、その前にお花屋さんが「チョークを落とすのに水が必要だったらうちの水を使いなさいね」という。子どもがまちに出てこんなことをやっている姿を見てまちの人の姿勢が変わってくるんです。

「遊び」はまちを変えていくきっかけになっていく可能性を秘めていると思っています。神田では防災イベントと一緒にやって、ウォータースライダーをつくってみたり、消防団の人たちがいたり、北区ではスターウォーズのライトセーバーを持って交通整理をしているおとうさんがいたり、まちのいろいろな立場の人が、遊びをキーワードに活躍できたらと思っています。渋谷でもそんなきっかけがつけられたらいいなと楽しみです。

## 今後、渋谷区で展開できたらいいなという企画

**入江 (S) :** 私たちの活動は、子どもがいる限りずっと続くと思っています。いま、2つ目のプレーパークをつくりたいと動いています。子どもの足で行けるところに増やしていくことが大きな目標です。そのためには私たちが少数であることの自覚を持たなければなりません。外に向かって活動をもっと伝えていかなければならないと思っています。出張プレーパークやスタッフの派遣などを積極的にやっていくつもりです。本日のような機会をせっかくいただいたので、これをきっかけとして続けていけたらいいなと思います。「みちあそび」のことも知ったので、私たちだけではなく地域の人の力も借りて、「みちあそび」をやりたいですね。



**嶋村 (T)** : 実は昭和40年代から、子どもが交通事故に合わずに近所で遊べるように遊戯道路という、商店街の買い物道路やスクールゾーンと同様に道路を規制する制度があって渋谷区にも指定されている場所が20ヶ所あります。

**紫牟田** : まだあるんですか？

**入江 (S)** : あるんです。私もアメリカ橋プレーパークをやっていたときに、仲間に「うちのまちにもあるよ」って言われました。

**嶋村** : それがいま使われていないんだよね。

**入江 (S)** : でも、1ヶ月に1回止めても良いということが決まっている。

**嶋村 (T)** : それがわりと恵比寿近辺に集中しているんです。今年2、3ヶ所でいいから、実際止めて子どもたちの遊び場や交流の場所にするにはできないかと思っています。

**紫牟田** : いつやりましょうか。

**嶋村 (T)** : いつやりましょうか、関心がある方とぜひ会議できたらいいなと思います。

**左京** : とはいえ、今日は終了時間になってしまいました。こんなに積み残しがある想像会議もなかなか珍しいので、続編を近日開催しましょう。参加されたみなさんにはアンケートにご意見ください。それを汲みながら設計したいと思います。

**紫牟田** : 時間は過ぎてしまうんですが、参加されている方でこれだけは言いたいという方がいればご発言をお願いします。

**質問者A** : 子どもの遊びの経験が貧困になっているとお話がありましたが、泥んこになったりびしょぬれになったりするのとはすごく楽しいでしょうが、いきなり泥んこや水被ったり、虫のせたりをそれまでやってこなかった子が入っていけるのでしょうか。意外とできてしまうのでしょうか。

**嶋村 (T)** : やってしまえばできてしまうものではないかなというのはあります。だけど、最初からみんなやるわけではありません。砂をパラパラしているだけで楽しい子もちろんいますし。6年も7年もずっと見ていただけだったのに突然やりだしたという子もいたりしますから、不思議ですよ、子どもって。

**入江 (S)** : ずっと、やらない子もいます。

**高橋 (T)** : 子どもの的には大丈夫だと思います。さっきの水を放水しているときも最初は誰も来ませんでしたが、一人がやり始めて「自分もやってもいいんだ」と思うとみんなやり始めます。泥を嫌がる子も居ますが、大人の頭のほうをどうやって柔らかくして行って、子どもに遊べるよということを伝えていくことのほうが難しいのかなと思います。

経験から言えば、子ども自体は遊ぶことのドアを叩いてあげてれば、和らいできてどんどん遊び心が出てきます。逆に大人の側の不安を徐々に解消しながらやらないと、たぶん場自体が続いていかない。やらない子のことも保証できるか、ということも場にとって大事なかなと思います。劇的すぎると反論も多いと思うので、大人の側も徐々に最初はお家のホースでちょろちょろやるくらいから始めても良いと思うので、やりやすいかたちでいいのかなと思います。

**質問者B** : 自分の子どもは3歳なんですけど、池袋でもこういう場ができたらいいなとプレーパークに関心を持っていて、今回参加しました。「みちあそび」という新しいことも知って有意義でした。ありがとうございます。私が住んでいるところは雑司が谷というところで、みちあそびにまさに最適なところだと思っていながらうかがっていましたが、TOKYO PLAYさんの力を借りたいと思ったらどうしたら良いでしょうか。

**嶋村 (T)** : 遊戯道路は全部で都内に800ヶ所以上あって、雑司が谷の辺りにもあつたりします。最近僕たちが始めている「とうきょうご近所みちあそび道プロジェクト」では、やってみたい人のサ

ポートをしたいと思っけていまして、今日お配りしたパンフレットにも入っていますから、一緒に考えましょう。普通、子育てをしている人は横の繋がりて活動しますが、道路規制やまちのことは、町会のような縦社会で動いていたりするので、横糸と縦糸がどう繋がるかというところが実際にやれる／やれないの境目になったりしているところもあります。そういう意味での作戦会議をぜひ一緒にできたらいいなと思います。

**高橋（T）**：北区では、お母さん2人で団体立ち上げてみた人もいますから、気軽に登録していただいて、ぜひご相談ください。

**質問者B**:ありがとうございます。

**嶋村（T）**：小水さんが、プレーパークをつくるときに、「抑えるところは抑えなくてはいけないんだけど、見切り発車も大事」と言っていたのがすごく印象的でした。完全に計画を立てるのではなく、やりながらつくっていくということもあると思います。大人も“未知との遭遇”をちゃんと遊んでいくということが大事になって思いますね。

**左京**：子どもの置かれているこの息苦しい環境はこのまま私たち大人が置かれている閉塞感の写し鏡だと思うんです。子どもたちの遊び場を考えるとすることは、実は私たち自身の置かれている社会や地域のあり方を考えていくことになるだろうし、それに対して、ネガティブなアプローチではなく、子どもたちの遊び場をを考えていくことはみんなにとって生き心地の良い地域や社会をつくっていくことになるのではないかと思っています。

**紫牟田**：この会議では、遊戯道路の活用と、プレーパークの展開というふたつの提案が出ましたので、ぜひ続編を行って、実現に向かいたいと思います。

**左京**：そうですね。何らかのかたちで今日話し合った学びを今後には生かす場を開きたいと思います。今日参加していただいた方にはお声がけしますので、都合が合う方が来ていただければいいなと思います。

**紫牟田**：それでは、本日は時間も過ぎておりますので、これで終わりにしたいと思います。登壇者のみなさま、会場のみなさま、本当にありがとうございました。